

巻頭特集 災害と疫学

今回の特集テーマは、災害と疫学です。私たちの社会は、地震、津波、豪雨、噴火などの自然災害リスクに限らず、原子力、化学事故、テロリズムといった人為的な災害リスクと常に隣り合わせにあります。もっと広げると、世界のどこかでロジスティックが途絶えることで、食料、日用品、医薬品の供給不安といった災害リスクも存在します。たかだか半世紀ほど前まで日本人死因の第一位であった感染症の脅威を忘れていていた頃に、COVID-19という災害に直面しています。疫学や疫学者が災害においてできることについて、この分野を牽引されてきたお二人の疫学者に今後の展望をお示しいただきます。

(編集担当: 藤野 善久)

災害と疫学

広島大学 大学院医系科学研究科 公衆衛生学 教授
久保 達彦



自然災害の件数が増加傾向にある。これは我が国のみならず全世界的な傾向である。気候変動の進行に伴い増加するとされる豪雨の高頻度化、強い台風増加、海面水位の上昇による高潮被害、豪雪等の気象リスクを身をもって知覚されている読者も少なくないのではないだろうか。実際、我が国においては災害リスクに曝される人口(2015年)は全体の67.5%にも上り、人口分布は災害リスク地域に偏っている。

このような時代背景のなかで、疫学に何ができるのか? 「明確に規定された人間集団の中で出現する健康関連のいろいろな事象の頻度と分布およびそれらに影響を与える要因を明らかにして、健康関連の諸問題に対する有効な対策樹立に役立てるための科学」とい

う疫学の定義に基づけば、災害急性期における疫学の役割は「災害時に人間集団の中で出現する健康事象の頻度と

分布およびそれらに影響する要因を明らかにして、有効な対策や支援につなげる手法」を確立することと言えよう

CONTENTS

巻頭特集 災害と疫学	9/16韓国疫学会 Korea-Japan Joint Epidemiology Seminarのご報告
災害と疫学	片野田 耕太 7
..... 久保 達彦 1	
災害と疫学: 3つの目的	研究室紹介
..... 尾島 俊之 2	産業医科大学 医学部
学術総会in千葉・舞浜一歩の登録のお願い	公衆衛生学講座
..... 近藤 克則 3	
日本疫学会プレセミナー2022 開催決定	 松田 晋哉 8
..... 本庄 かおり 4	一般社団法人日本疫学会代議員・選出
日本疫学会サマーセミナー2021開催報告	理事・監事・理事長選挙について 9
..... 菊池 宏幸 5	事務局だより 9
World Congress of Epidemiology (WCE) 2021 開催報告	編集後記 10
..... 大西 一成 6	

か。疫学がこの役割を果たすためには、混乱する災害現場においても健康データを収集する必要があるが、その収集は容易ではなく、災害急性期の健康データは地球規模でみても不足している。疫学者としてはデータがないのであれば、データを集める仕組みをつくるよりない。

この課題にオールジャパンレベルで正面から取り組んだのは、災害医療関係者であった。東日本大震災(2011年)を契機にして疫学者も参加してフィリピン

の災害時サーベイランスシステムSPEEDをもとに日本版SPEED(J-SPEED)を開発して、災害医療チームの標準診療日報様式と位置付けた。結果、熊本地震(2016年)においては被災傷病者8,089名分の健康データをリアルタイムで収集することに成功した。J-SPEEDの手法はWHO国際標準としても採用され、2019年にモザンビークで発生したサイクロン災害では14,178件の健康データがリアルタイムで収集された。データが集まった後には解析と報告が必要だ。

J-SPEEDでは、データを災害医療の調整本部で即日解析して日報化され、翌日のオペレーションに向けてのデータに基づく医療調整に役立てられている。データは報告を行った災害医療チームにもフィードバックされ、各チームの活動方針決定にも役立てられている。これらの解析・報告作業にも疫学者が関与している。疫学者が災害急性期にも仕事ができる状況が地球規模で整ってきている。

■プロフィール

2000年産業医科大学医学部卒、2006年同大学院修了(臨床疫学)、旭化成産業医等を経て2009年より同大公衆衛生学講師/環境疫学准教授、2019年より現職。委員等：日本災害医学会災害医学あり方委員会・委員、日本DMAT統括DMAT、国際緊急援助隊総合調整部会・委員

災害と疫学：3つの目的

浜松医科大学 健康社会医学講座教授
尾島 俊之



災害の概念と種類

災害とは、自然現象や人為的な原因で、人々の命や社会生活に受ける被害である。また、災害医学においては、対応必要量の増加が通常の対応能力を上回った状態と定義されている。災害には、自然災害として、風水害等の気象災害、地震や火山などの地質災害、感染症や昆虫異常発生等の生物学系災害が、人為災害として、交通災害、産業災害、紛争災害などがある。放射線事故との複合災害やCOVID-19なども重要な災害である。

災害に関する疫学の3つの目的

災害に関する疫学の主要な目的として、以下の3つがある。

【現在の災害の対応への貢献】

現在の災害および被災者、リソースの状況等を定量的に把握し、リソースの適切な確保や配置などにより対応を進める

ものである。地理的分布、時間による変化、人の属性による特徴などの記述疫学が最も役に立つことが多く、時に、分析疫学や介入研究が貢献することもある。災害対応体制についてのヘルスサービスマネジメント等も重要である。被災者や対応者に一定の負担を掛けて情報を収集する際には、基本的に現在の災害の対応に貢献する必要がある。

【次の災害の対応への貢献】

近年、風水害、地震、感染症などは繰り返し発生しており、目の前の災害に対応しながらも、次の災害を見据えての検討は重要である。定常的に収集される情報や、現在の災害対応のために収集された情報や記録などを解析する形や、ある程度落ち着いた状況では、研究のために情報収集することもある。

【災害以外の課題解決への貢献】

例えば、災害による被害を操作変数として用いて、それによって、生活状

況や人と人とのつながり等の曝露が変化し、さらに健康状態が変化する状況をとらえたデータを活用するものである。ランダム化比較試験が困難な曝露の影響を解明することができる。

災害疫学の基盤

迅速に災害対応が行われるためには、情報収集の電子化は非常に重要である。災害対応中の種々の情報が保存されていると、事後的な検証や研究にも資するものとなる。また、収集された貴重な情報は、個人情報保護などを行った上で、公共財として共有・利活用を推進する必要がある。

倫理的な側面も重要である。2021年に改正された「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」では、「公衆衛生上の危害の発生又は拡大を防止するため緊急に研究を実施する必要があると判断される場合」には、研

究機関の長の実施許可により研究を実施し、倫理審査は後から行うことも例外的に認められることが記載された。しかしながら、対象者に対して過度な負担をかけず、倫理的に研究を遂行できるよう、日頃から研修や準備をしておく必要がある。

災害疫学は未解決な課題が山積して

いるフロンティアであり、また適切に災害対応が行われるようになるためには、疫学の活用は必須である。多くの疫学者の参画を期待したい。

参考文献

- 1) 日本疫学会監修. 疫学の事典. 朝倉書店; 2022. (編集集中)

- 2) 國井修、石井美恵子、尾島俊之編集. みんなで取り組む災害時の保健・医療・福祉活動. 南山堂; 2022. (編集集中)

- 3) Horney JA, ed. Disaster Epidemiology: Methods and Applications. Academic Press; 2017.

■プロフィール

1987年3月 自治医科大学医学部卒、1992年 愛知県設楽保健所長、1995年 自治医科大学公衆衛生学教室 (2002-2003年 米国UCLA)、2006年 浜松医科大学健康社会医学講座教授。現在、厚生労働行政推進調査事業「災害発生時の分野横断的かつ長期的なマネジメント体制構築に資する研究」研究代表者など。

学術総会in千葉・舞浜一早めの登録のお願い

第32回日本疫学会学術総会 会長
千葉大学 予防医学センター 社会予防医学研究部門
国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 老年学評価研究部
近藤 克則



第32回を迎える日本疫学会学術総会を、はじめて千葉で開催させていただくことを大変光栄に思います。

コロナウイルスの変異によって、感染力が強くなったり、ワクチンの効果が低下したりするなどの事態が起きなければ、本学会史上初のハイブリッド開催になる見込みです。およそ2年間の遠出自粛を解いて、学会参加はもちろん、仲間との交流や週末をご家族で楽しんでいただきたいと、リゾート施設に隣接する舞浜のホテルを現地会場とし準備を進めています。ハイブリッド開催なので、自宅から一部日程のみWeb参加もしていただけます。

学術総会のテーマは「社会と疫学」としました。2005年に拙著「健康格差社会—何が心と健康を蝕むのか」にまとめた時、「おそらく今は社会疫学の黎明期である」(p169)と記しました。今では社会疫学は黎明期から隆盛期を迎えています。また健康日本21(第二次)の基本的方向で謳われた「健康格差の縮小」をめざすには、健康格差の実態や健康の社会的決定要因に関する記述疫学や分析疫学によるメカニズムの解明だけに止めるわけにはいきません。介入研究が必要です。これらを踏まえて、社会疫学や社会への介入・適応、その評価における疫学の活用につ

いて考える企画をしました。社会から疫学への期待が高まっている新型コロナウイルス感染症や災害に関する企画、AMEDとの共催シンポなども用意しました。本学術総会が、「社会と疫学」の関連を考える機会となることを願っています。

感染症対策上、現地参加人数には上限を設定し、参加登録時に、現地参加希望か否かをご記入いただき、現地参加希望者多数の場合には抽選となります。見込みを上回る多数の方に参加登録していただければ、現地参加の会場を広げることも検討します。早めにお申し込みください。

日本疫学会プレセミナー2022 開催決定

大阪医科薬科大学 本庄 かおり

第32回日本疫学会学術総会(2022年1月、近藤克則会長・千葉大学教授)において、「日本疫学会プレセミナー」を開催させていただくことになりました。本企画は、日本疫学会会員の人材育成・研究力の向上に資するセミナーや演習の機会の提供を目的に実施いたします。

日本疫学会プレセミナー実施にあたっては、日本疫学会の会員からセミナー企画・実施者を広く公募しました。申請のあった企画の中から、疫学専門家・人材育成委員会 疫学教育推進WGにより、下記の魅力的な企画が選定されました。

企画1. いま改めて「欠測データ」の解析について考える (中級・上級レベル)

【企画者】

伊藤 ゆり
(大阪医科大学 研究支援センター 医療統計室)
篠崎 智大
(東京理科大学 工学部 情報工学科)

【概要】

欠測データの取り扱い、その解析手法によって、選択バイアス(完全ケース解析など)、測定誤差バイアス(単一補完やmissing categoryなど)、モデル特定バイアス(補完法や完全尤度、IPCW法など)などの形態をとって現れる可能性があります。疫学研究を実施する上で、欠測データの取り扱いについていま一度理解を深めるとともに、統計ソフトウェアを用いて、実際にはどのように分析するかを紹介します。

【実施形態】

ハイブリッド方式
(現地参加(定員180名)+オンライン)

企画2. 査読のいろは (中級・上級レベル)

【企画者】

陣内 裕成
(日本医科大学 公衆衛生学教室)
長嶺 由衣子
(東京医科歯科大学 総合診療医学)

【概要】

なかなか学ぶ機会のない中で突然送られてくる査読依頼。どのようなプロセスで、どのようなポイントでコメントをすべきか、系統的に学んだことのない方も多いのではないのでしょうか? そんな疑問にお答えすべく本セミナーを企画しました。

“Journal of Nutrition”、“Journal of Academy of Nutrition and Dietetics”の編集委員、“Annals of Internal Medicine”、“BMJ”のベストレビューにも選出された講師から「査読」の要諦を穿つ講演が提供されます。

【実施形態】

オンラインのみ

プレセミナーは2022年1月26日(水)
16:00～18:00開催予定です。

各セミナーの概要、申し込み方法等は日本疫学会HP(URL:https://jeaweb.jp/activities/seminars/individual.html?entry_id=911)をご参照ください。

皆さま奮ってご参加いただけますようお願い申し上げます。

日本疫学会サマーセミナー2021開催報告

東京医科大学 公衆衛生学分野
菊池 宏幸

疫学専門家・人材育成委員会・疫学教育推進WGでは、疫学の初学者向けに、毎年「サマーセミナー」を開催しています。昨年度は新型コロナウイルス感染症の流行による中止となりましたが、今年度は8月22日に初めて「オンライン形式」で実施しました。テーマは「新型コロナウイルス感染症対策から考える疫学のものの見方と考え方」、講師は、名古屋市立大学の鈴木貞夫先生にお願いしました。今回は初めてのオンライン開催ということでどの程度集まっていたかという不安もありましたが、募集開始後まもなく申し込みが殺到し、定員80名がわずか6時間で埋まりました。

鈴木貞夫先生から、「疫学という学問体系のなかで、コロナ禍はどのように理解され、伝えられてきたか、また、今後どうあるべきか」を中心にお話しいただきました。具体的には、流行初期にみられた「日本の超過死亡」報道、「PCR検査不足」議論、さらに近年の「ワクチン不足」報道について取り上げていただき、疫学指標から、その報道の正誤と、なぜ誤った報道がなされたのかについて、非常にわかりやすく解説くださいました。「後から正解がわかる問題に対して、（深く考えずに）発言してしまうことに対して、怖さを感じるべき。疫学を志す者は、まず因果の流れを推測するシナリオを作り、自分でとことんまで考えよう。」という先生のお言葉はとても心に刺さりました。

鈴木先生のご講演に続いて、「疫学の未来を語る若手の集い」有志の皆さまにご協力いただき、グループワークを行いました。各グループ内でも大変活発な意見交換がなされ、その後の全体共有の時間では、講師への質問が终わらず、予定時間を大幅に超えるほどでした。

参加者のアンケートでは、95%以上の方（60/63）が「セミナーの内容が期待通り、または期待以上だった」と回答し、「鈴木先生の疫学者としての視点だけでなく、マインドや社会に対する姿勢も大変勉強になりました」「なるほど！と思うほどにかみ砕いて説明していただいたので理解につながりました。」というコメントをいただくなど、鈴木先生のご講演に対し、大変好評をいただきました。また後半のグループワークに対しても、「現在起こっている問題に対する、研究者としてあるいは

疫学としての考え方についてモヤモヤする部分を共有し、議論できた」「疫学者・若手どうしのディスカッションが大変有意義だった」といった声が多数寄せられました。グループワークで意見交換ができる時間を設けたことも、参加者の高評価につながったと感じています。

最後に、講師を引き受けてくださった（+想定外のハプニングにも臨機応変にご対応いただきました）鈴木貞夫先生に、深く御礼申し上げます。また後半のファシリテーターを担当くださった若手の会の皆さまおよびWGの先生方、さらに会場準備に奔走いただき、かつ司会までご担当いただいた陣内裕成先生、運営にご尽力くださった事務局の皆さまにも、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。



鈴木貞夫先生（名古屋市立大学）

World Congress of Epidemiology (WCE) 2021 開催報告

国際化推進委員会 聖路加国際大学公衆衛生大学院
大西 一成



2021年9月3日～6日にWorld Congress of Epidemiology (WCE) 2021が開催され無事に終了いたしました。準備に携わった先生方、発表された先生方、お疲れさまでした。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって、当初2020年9月13日～16日の開催が1年延期され、2月には新たに演題が追加募集されました。

国際化推進委員会では、日本疫学会 JEA若手会員向けと国際疫学会西太平洋地域IEA-WP若手会員向けの2つのトラベルアワードを準備し、いずれも開催地メルボルンまでの旅費も含むグラントを想定していました。しかし、開催はオンラインで実施されることが最終的に決定したため、トラベルアワードの内容を大幅に変更しました。特にIEA-WP会員向けアワードについては旅費が不要となったため、参加費のみの免除に切り替え、授与数を当初の5名から18名に増やすことができました。

大会は、WEBブラウザを用いた専用のプラットフォームで発表を視聴する方式で行われました(図)。発表演者は、査読結果に応じて、あらかじめ音声入りのポスター(POSTERS)や、発表動画(ON DEMAND)を提出しました。聴講者は、演者ごとのページで質問などのやりとりを行うことがで

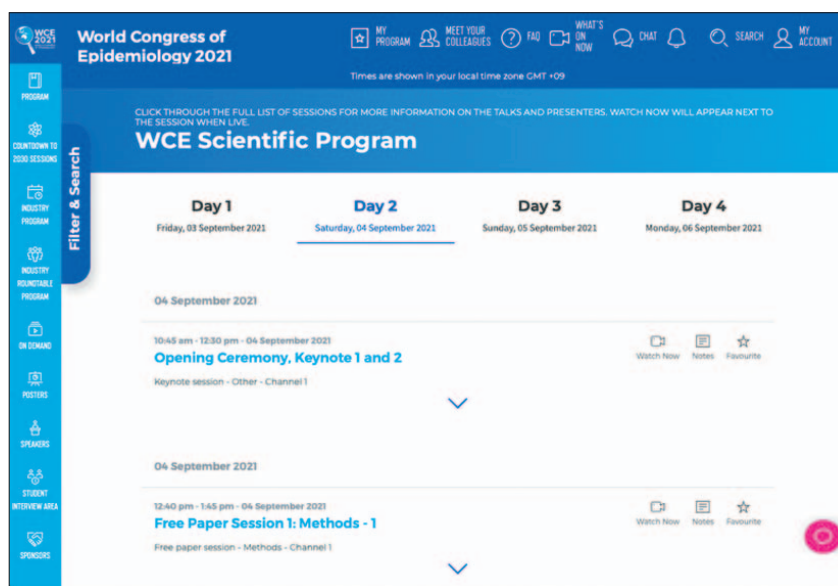
き、投稿するとダイレクトに演者へメールで通知される仕組みでした。

現地で開催されていた学会と比較して、スケジュールが被ったプログラムにも参加(視聴)できるメリットがありました。一方、学会自体はオーストラリア時間の昼から夜頃の時間帯で開催され、最後の質疑はライブであったため、時差で夜中の時間帯に割り当てられた発表演者は大変だったとうかがえました。

発表コンテンツは、開催日から12か月の視聴が可能で、今から参加登録

しても全ライブトーク(録画)、発表コンテンツを視聴することが可能です。本会では、特に、若手疫学者の育成を念頭に置いた表彰や、産業との連携への強い意欲があったように感じました。

今回の学会に限らず、さまざまな学会においてオンラインで試行錯誤がされていますが、それらとは異なるWCE独自のハイブリッド形式の新たな学会の形が創出されました。今後も、このようなスタイルの学会がしばらく続くのかもしれませんが。



WCE2021プラットフォーム画面

9/16韓国疫学会 Korea-Japan Joint Epidemiology Seminarのご報告

国際化推進委員
国立がん研究センター がん対策研究所
片野 耕太



去る9月16日、ハイブリッドで開催された韓国疫学会 (Korean Society of Epidemiology) の学術総会において、日韓セミナー (韓国開催時の正式名称 Korea-Japan Joint Epidemiology Seminar) が催されました。今回のテーマは新型コロナウイルス感染症 (コロナ) でした。

トップバッターの京大・西浦博先生は、コロナの流行当初は、最初の感染者のうち次の感染者に感染させる割合が10%程度で「密」の環境に限られていたことから、「3密の回避」という戦略がとられ、緊急事態宣言などの行動制限が奏功していたことをデータで示されました。感染力の強いデルタ株の出現でそれが一変し、これまでの行動制限では感染制御が難しくなり、今年夏の感染増加が起こったということです。ワクチンについてもその普及によって集団免疫の獲得に近づくことを

モデルによって示されました。

第2演者のKonyang University・Sukhyun Ryu先生は、韓国におけるコロナの流行の6つのフェーズでの感染拡大の背景を数理モデルの推計結果で説明されました。韓国でも現在のフェーズが最も感染者数が多く、デルタ株が原因だとのこと。疫学者らしく、他の感染症の発症と薬剤の使用量が減ったことをコロナによる正の影響として紹介されました。

第3演者の阪大・忽那賢志先生は、日本の感染症医療体制が、エボラ出血熱やMERSのように致死率が高いが感染率は高い疾患を想定しており、コロナのような状況では医療機関、専門医ともに数が圧倒的に足りないことを指摘されました。後半は武漢からのチャーター機内での感染者の対応に当たったご経験、さらには臨床研究をスピーディに実施するための環境整備も

重要だと強調されていました。

最後のGachon University・Jaehun Jung先生も韓国で感染拡大を予測したことがニュースに取り上げられる有名な方で、西浦先生同様に、感染症モデルを用いた推計をたくさん紹介されました。最後にコロナの出口戦略として、ワクチンの普及とブースター接種を条件に、コロナを「普通の病気」に変えることが必要だと述べられていたのが印象的でした。西浦先生も、ある程度の流行 (とその繰り返し) を社会が許容する必要があるとの見解を示されていて、コロナとの共存を近い将来像として描いておられるようでした。

会場のハウリングの関係でオンライン参加者が声をかせないというトラブルがありましたが、どの発表も迫真に迫る内容で、1時間半があつという間でした。次回は日本でぜひオンラインで開催したいと思います。

 [Chairpersons]  Aesun Shin Seoul National University Korean Society of Epidemiology  Kota Katanoda National Cancer Center, Japan Japan Epidemiological Association	The 11th Korea-Japan Joint Epidemiology Seminar  Epidemiology and simulation modelling of COVID-19 Hiroshi Nishiura Kyoto University, Japan  Epidemiology of COVID-19 and collateral impact of the pandemic in South Korea Sukhyun Ryu Konyang University College of Medicine, Korea  How have medical institutions in Japan responded to COVID-19 Satoshi Kutsuna Osaka University, Japan  A long way to the recovery from COVID-19: evidence, planning, and reality Jaehun Jung, Gachon University College of Medicine, Korea
--	---

研究室紹介

産業医科大学 医学部
公衆衛生学講座教授
松田 晋哉

講座の概要

産業医科大学医学部公衆衛生学教室は、初代教授の華表宏有教授のもとで国際的視野を持って公衆衛生の教育・研究・実践を担う人材を育成するという方針で1978年に開講されました。1999年以降は、私が教室の運営を行っています。教室員は村松圭司准教授（医療政策、データサイエンス）、劉寧助教（ソーシャルマーケティング、中国語、日本語、英語のトリリンガル）、得津慶助教（ヘルスデータサイエンス）、松垣竜太郎助教（リハビリテーション）、今村英香研究員（心理学）で、そのほかに大学院生6名、非常勤の講師・助教13名という体制で教育、研究、地域公衆衛生活動の実践を行っています。

研究の特色

当講座の研究領域は主に2つです。第一のものはDPC、医療・介護レセプト、特定健診・特定保健指導関連データ、日常生活圏域ニーズ調査データなど数多くのヘルスビッグデータを

活用した研究です。DPCについては制度発足当初からのデータをデータベース化しています。また、医療・介護レセプトについては、国内の多くの自治体のご協力をいただいて、1,000万人以上の個人について最長13年、医療・介護レセプトを個人単位で連結分析できるデータベースを構築しています。具体的な研究内容は医療・介護の制度研究（例えば、政策効果の検討や医療介護資源の適正配置など）が中心ですが、そのほかにも学内外の臨床系教室および本学産業生態科学研究所の環境疫学研究室（藤野善久教授）といわゆるReal World Dataによる臨床研究を数多く手がけています。また、データ提出にご協力いただいている自治体を対象に分析結果に基づく研修会を自治体ごとに年2回実施し、フィードバックを行い、研究成果を地域公衆衛生の実務に役立てていただくよう心掛けています。

第二のものは英語、フランス語、ドイツ語、中国語など多言語に対応できるというマルチリンガルな人材がいる

ことを活かして医療介護および産業保健に関する国際比較研究を精力的に行っています。現在は、介護関連情報の標準化を目的として、要介護状態および介護行為のICHI、ICFによる標準コード化、事例集の多言語化を行っています。また、国内の外国人労働者の産業保健に係る研究も行っています。

データ分析に関しては、適宜セミナーや研修会も行っていますので、関心のある方は当教室のホームページの情報を参考にご参加いただければと思います。

ビッグデータ分析に取り組む
村松准教授(右)と劉助教(左)

■プロフィール

1985年産業医科大学医学部卒業。産業医科大学病院等で臨床研修を行った後、フランス国立公衆衛生学校に留学(1992年卒業)。この間、1990年から京都大学に在籍し、1993年京都大学博士号（医学）取得。1999年3月から産業医科大学医学部公衆衛生学教授。専門領域は保健医療システム論。

一般社団法人日本疫学会代議員・選出理事・監事・理事長選挙について

一般社団法人日本疫学会定款、代議員および役員の選任に関する細則に基づき、下記の日程で、2021年度日本疫学会代議員・選出理事・監事・理事長選挙を実施しました。

●代議員選挙

立候補受付（3/10～4/30）、候補者告示（5/25）、電子投票（6/11～6/25）、開票（6/25）、結果報告（6/28）

●選出理事・監事選挙

選出理事立候補・監事推薦の受付（7/2～7/19）、候補者告示（7/26）、電子投票（8/4～8/19）、開票（8/19）、結果報告（8/20）※北海道・東北、関東甲信越、東京、近畿ブロックの選出理事選挙は、候補者数が定数と同数でしたので、無投票当選となり、投票は行いませんでした。

●理事長（代表理事）選挙

立候補受付（8/24～9/9）、投票用紙等発送（9/10）、投票受付（9/13～9/24）、9/28に開票し、11/5に開催される理事会で結果報告を行う予定です。

会員各位のご支援で円滑に選挙を実施することができました。選挙管理委員を代表し、ご報告と御礼を申し上げます。

2021年10月1日

選挙管理委員会 委員長 福田 吉治

事務局だより

1) 会費納入のお願い

2021年度(2020年12月～2021年11月)までの会費を未納入の方は、すみやかに
お支払いいただきますようお願い申し上げます。
2022年度の会費につきましては、12月にご請求させていただきます。

2) ご登録情報更新のお願い

会員専用ページ(<https://coco.cococica.com/jea>)にログインいただき、【登録内容確認・変更】ページにて、登録情報のご確認と更新をお願いいたします。会費のお支払状況もご確認いただけます。
※ログインIDは、ご登録のメールアドレスです。パスワードをお忘れの場合は、ログイン画面で再設定してください。

3) 疫学専門家認定制度の申請

2021年の疫学専門家、上級疫学専門家(疫学専門家との同時申請含む)の認定申請の受付を締め切りました。今後の予定は、下記のとおりです。

■疫学専門家

書類審査

2021年9月27日(月)～12月14日(火)

その後、書類審査の結果発表、筆記試験の詳細の通知

筆記試験

2022年1月28日(金)

第32回学術総会終了後

試験会場：学術総会会場を予定

発表

2022年3月を予定

(認定日：2022年4月1日)

■上級疫学専門家

(疫学専門家との同時申請を含む)

書類審査

2021年9月27日(月)～12月14日(火)

発表

2021年12月を予定

(認定日：2022年4月1日)

4) JE冊子購読のお申込み

Journal of Epidemiologyの冊子の年間購読料(2号合本、年6回発行)は、
会員：9,000円／非会員：26,000円(送料込)です。2022年のご購読をご希望の方は、事務局にお申込みください。

5) 日本疫学会会員数：2,559名

(2021年10月1日現在)

名誉会員：31名 代議員：208名

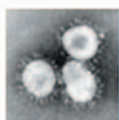
普通会员：2,320名

編集後記

今回のニュースレターでは、疫学の多様な応用や発展が紹介されています。特集では「災害と疫学」を取り上げています。また、次回の学術総会では「社会と疫学」がテーマとして大会長より紹介いただきました。サマーセミナーの活動報告では「新型コロナウイルス感染症対策から考える疫学のものの見方と考え方」が報告されました。研究室紹介では、DPCやレセプトによるヘルスビッグ

データによる取り組みが紹介されました。

私が疫学会に入会した頃は、がん、循環器が話題の大半を占めていたような感覚があります。技術の発展、健康問題の変化など時代や社会環境の趨勢に伴い、疫学の役割や期待も変遷していくことを実感させられます。今後も、学術総会やニュースレターなど疫学会を通じた会員の相互交流によって、新しい疫学が拓けていくことに期待が膨らみます。 (産業医科大学 藤野 善久)



新型コロナウイルス
関連情報

【広報委員会より】

新型コロナウイルス関連情報特設サイト (<https://jeaweb.jp/covid/>) を、2020年3月2日に開設し、疫学的用語等の解説、研究紹介、有用なリンクの他、学会からの要望書を掲載しています。会員からの積極的な情報提供やご意見を期待しています。

発行 一般社団法人 日本疫学会 〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-2 本郷MTビル4階 ✉ jea@jeaweb.jp

©Japan Epidemiological Association All Rights Reserved.